

社会の担い手としての自負と学習意欲を 知識の習得・活用・探究を通して育む

社会課題や政治に無関心になる一因には、「自分では何も変えられない」と感じていることがあると思われます。そうした悲観的な気持ちを、教育の力で払拭したいと考え、試行錯誤を続けてきた先生の実践をご紹介します。

取材・文/松井大助
撮影/平山 諭



社会科
黒崎洋介先生

大学院卒業後、高校教師に。初任の湘南台高校および現在の瀬谷西高校で、公民科の授業だけでなく、総合的な学習の時間を活用したシチズンシップ教育やキャリア教育に取り組む。中央教育審議会「高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム」に委員として参加。

生徒に対する想い

自分のキャリアだけでなく
公共のためにも学んでほしい

神奈川県立瀬谷西高校には、勉強に苦手意識をもち、「自分には向かない」と思い込んでいる生徒が少なからずいる。それだけに、授業で学んでいることが何につながるのかわからないと、あからさまにやる気を失うことがある。黒崎先生はそうした生徒たちに、「学校で学んでいることって役立つんだ」という実感をもたらしたいと考えている。それによって、生徒の学ぶ意欲を高めたい、とも。

では授業で学んだことは、現在および将来に具体的にどう「役立つ」のか。想定している「**私的な領域への参加**」ができるようになることだ。

「自分で職業を選んで専門性を発揮できるようになることや、一人暮らしや子育てをできるようにすることですね。キャリア教育と重なる部分が大きいと思います」

もう一つ、「**公的な領域への参加**」ができるようになる意義も感じてほしいという。

「選挙で自分なりの考えをもって候補者を選んで投票できるようにすることや、地域の課題解決にその住民として関わられるようになること。シチズンシップ教育といえると思います。今の学校教育は、学びを『私的な領域』に役立てるほうに寄りすぎているかな、と思うことがあ

るんですね。もちろん、それも大事なことです。ですが、学校教育には本来、子どもたちの公共性を育む役割もあったと思うのです。社会の担い手になるうえで、学校の勉強は役立つよ、ということまで伝えていきたいと思っています」

授業の実践

実社会に近い文脈のなかで
学んだ知識を活用する

そのために公民科の授業で、黒崎先生が強く意識していることがある。

教科書で現代社会の仕組みなどを学んだあとで、「習得した知識や概念を、実社会に近い文脈のなかで活用・探究する」機会まで授業の中に設けることだ。

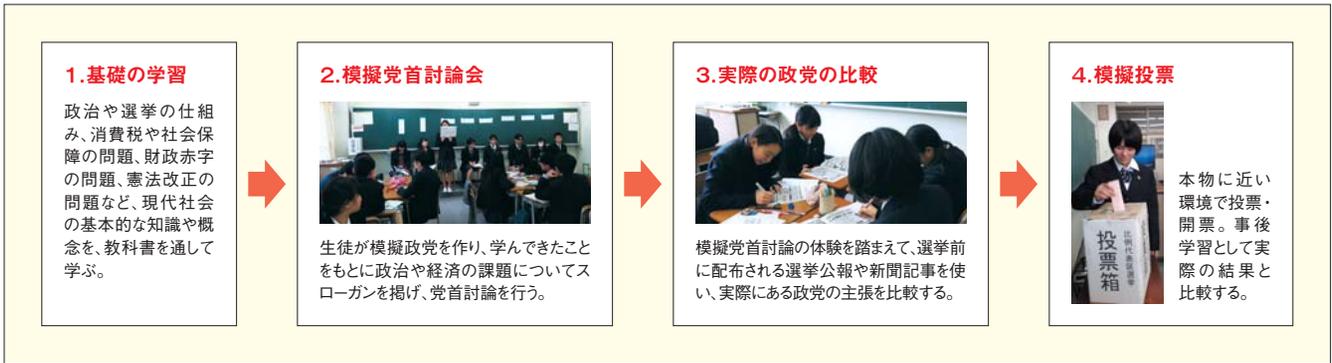
例えば「**模擬投票**」。

神奈川県では、政治参加する市民を育てようと、2010年度より参議院選挙のたびに、全県立高校で模擬投票を行っている。黒崎先生はこの取り組みを1年生の「現代社会」の授業で行っているが、ただの体験イベントで終わらせないよう、全体構成を工夫しているのだ。事前学習を充実させることで、「学んだ基礎知識を役立てて投票先を考える」というプログラムに落とし込んでいる。

あるいは「**模擬裁判**」。

架空の民事訴訟について、班ごとに「原告側の弁護士」「被告側の弁護士」「判決を下す裁判官」の役に分かれて討論する

■ 模擬投票までの事前学習



模擬裁判。裁判官役の生徒たちが判決とその理由を述べたあとで、講師の弁護士がポイントを解説。生徒たちは自分たちの考えたことと照らし合わせながら興味津々で聴いていた。

授業だ。それまでに基本的な人権や憲法のことを学んできた生徒たちに対して、黒崎先生はこんなお題を用意した。

原告は高校生アイドルKUROSAKI。ある雑誌が次号で自分の家の写真を、次々号で新曲の酷評を載せると知って、記事にするのを止めてくれ、と訴えた。

被告は瀬谷西出版。どちらもファンの要望に応えるための記事だ、と反論した。

さて、この問題をどうすればいいか。

弁護士役の各班は、自分たちが弁護する原告や被告のために、どんな法的根拠をもとに何を主張すればいいか考えた。裁判官役の各班は、この訴訟をどんな法的根拠をもとにジャッジするか考えた。

授業には地元の弁護士も講師として参加。黒崎先生と共に各班の机を回り、生徒たちの議論を深める手助けをした。

「記事を制限されるのっていいんだっけ」

「なんかあった、なんかあった」

「表現の自由！」

「でも読みたい人だっているよね」



アルバイトのトラブルによる寸劇では、店長役がバイト役に強気に出たり、懐柔策を用いたり、いろいろなストーリー展開が。法律のからむシナリオづくりを生徒たちが楽しんでいた。

「あれだ。知る権利ってどんなのだっけ」

「ここにも法的根拠を加えられない？」

「記事にされるとこんなことが起きて、プライバシーの侵害になるから、ということを考えればいいのか」

机をコの字に並べ変えて始まった裁判。原告側・被告側の各班が主張し、お互いに再反論もして、いよいよ判決へ。裁判官の班が、これまでの主張に対して、どんな法的根拠をもとにどういう結論を下すかを、全員が固唾を飲んで見守った。

逆のパターンから授業を組み立てることもある。「実社会にある課題を皆で考えることを通して、知識を習得する」構成だ。

例えば、実社会で遭遇しうるトラブルのロールプレイ。飲食店のアルバイトで、人手不足だからと高校生なのに無理やり深夜まで働かせたら。お皿を割ったからと給料を下げられたら。生徒たちは班ごとに、労働基準法の要点がまとめられたプリントを参考に、どう主張すれば泣き寝入りせずに店長を改心させられる

か議論。そのやり取りを寸劇にして、アルバイト役と店長役に分かれて演じた。

そのうえで、次の授業で労働者の権利や労働問題を改めて学ぶ、という流れだ。

情報の読み取り方や話し合いの作法も学ぶ

授業に取り組むそのプロセスのなかで、生徒に会得してもらおうとしているものもある。物事について思考・判断・表現するときに有効な型や手法だ。

「現代社会」の授業では、学習内容に関連する新聞記事もよく取り上げるのだが、その際に黒崎先生は、記事の見方・読み方から指南している。新聞を読んだことがない生徒も多いので、見出しとリードを読めば大まかな内容をつかめるという基本から入り、事実と意見を区別して読み取ることが大事である、ということまで。

また、グループワークや討論をするときは、ワークシートもうまく使って、「アイデアを出し合うときは他人の思いつきを批判しない」「意見を言うときはその主張に対する根拠も添える」などといった、話し合いのコツも伝えている。

「公的なことから私的なことまで、課題に取り組むときの思考力や判断力、表現力を育みたいんです。ただ、それを公民科の授業だけでやっていても効果は限定されると思っています。こうしたことは、各教科の授業をはじめ、どの教育活動でも目指せることのはず。ですので、今は教科横断的なカリキュラムで行うための仕組みづくりを進めています」

■ 瀬谷西高校(神奈川県)



School Data

普通科 / 1978年創立
 生徒数(2018年度) 1058人(男子505人・女子553人)
 進路状況(2017年度実績)
 大学111人・短大31人・専門学校 / 各種学校141人
 就職18人・その他40人
 〒246-0004 横浜市瀬谷区中屋敷2-2-5
 TEL 045-302-3535
 URL <http://www.seyanishi-h.pen-kanagawa.ed.jp/>

Outline

校訓は「夢と希望の実現」。キャリア・シチズンシップ教育を軸にした教育で、規範意識や道徳性、社会性を持ち備え、真摯に努力する力「自らが課題を発見し、課題を解決できる力」を育み、生徒の社会的自立を目指す。2016年度より新科目「公共」の教育課程開発校に。各教科の授業と総合学習を連携させたカリキュラムの構築や、全教員で一つの授業を参観し、授業中の生徒の学びを見とる授業研究会に取り組む。



多面的・多角的な見方・考え方を 実社会を意識して全教員で育む

秦野曾屋高校(神奈川県・県立)
理科
齋藤 昂良先生

黒崎先生とは湘南台高校で一緒でしたが、彼と当時の校長先生とはよく話題にしたテーマがあります。社会のあり方を自分たちで考える主権者の育成を、すべての教育活動で目的にできないかと。

例えば、物事に対して教科特有の見方・考え方を働かせられるようにすることも、主権者育成のために全教員でできることだと思うのです。理科の教員である私は、量的・関係的、共通性・多様性などに着目する視点などを育み、社会の教員は、歴史的な時間や国際的な関連性に着目する視点を育む。一つの現象を多面的・多角的にとらえられるようになれば、「テレビが言ったから」「偉い人が言ったから」ではなく、生徒が自分で物事を考えられます。

自ら問いを立て、その課題に粘り強く取り組み、新たな考えを創造する。学校全体でそうした力を生徒に育んでいきたいのです。



1 実社会で直面しうる課題を 生徒に身近な具体例に置き換えて問う

実社会の課題を考えると、黒崎先生は生徒に身近な具体例に置き換えて問う。多数決で見落とされる問題を考えるなら、「文化祭の出し物。お化け屋敷・フランクフルト・焼きそばで多数決を取ったらお化け屋敷が最多票に。これで決定でOK？(三択以上の多数決は似た意見の支持が分散する)」などと。

2 18歳の段階で何ができるようになるか という観点での授業・カリキュラムづくり

黒崎先生は、教育活動によって卒業までに何ができるようになるかを具体的に思い描く。選挙で自分の視点で候補者を選ぶ、面接で意思を表現できる、などだ。そしてそのために必要な知識や能力を習得・活用できる授業を構想する。瀬谷西高校ではこれに組織的に取り組む授業研究会も発足した。

3 教科横断的なカリキュラム・マネジメントで 効果的な知識習得や資質・能力の育成を

知識の習得から活用までする授業は増えたが、各教科個別の実践になりがちだ。でも、ある教科の知識を他教科の授業でも使えたらより頭に入るし、思考や議論の型は、どの授業でも活用できたほうが身につく。だから黒崎先生は、教科横断で皆で授業構想を練ることをさらに進めたいと思っている。

4 知識の習得は大事という認識の下 さまざまな手法での定着を目指す

社会のあり方を自分たちで考え、話し合い、形づくるには、基礎知識の理解も欠かせなくなる。だから黒崎先生は授業での知識習得も大事にしている。ただし、習得のための手法はいろいろあると考えていて、講義や穴埋めプリント、生徒の活動による知識習得などを組み合わせて取り入れている。

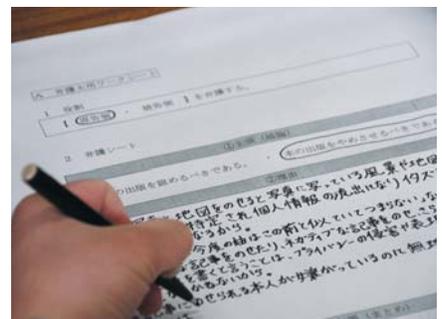
授業ができるまで

学校で学んだことを 実社会で活用できるように

黒崎先生が教師になったきっかけは、中学生や高校生のように、魅力的な社会科の先生に恵まれたことだった。

「社会のことを考える面白さや、『そういう視点もあるのか』と気づきをもたらしてくれた、というか。教育のもつ公共的な役割にも惹かれるようになりました」
教師を目指していた大学院生時代には、知識の活用というテーマにも興味をもつ。

「例えば作文用紙を1枚配り、習ったこ



模擬裁判に向けて原告・被告の主張を考える際はワークシートを活用。主張のあとで理由(根拠)を述べて、最後に改めて再主張するという構成になっている。



裁判で主張するための法的根拠をまとめるときは教科書が大活躍。表現の自由や知る権利などについて確認するために、教科書を見直して読み込む姿がそこかしこで見られた。

とについて自分の意見を書きなさい、と指示しても、それだけでは書けない子があります。習得した知識をどうやって使うのか、思考力や判断力、表現力をどう育めばいいかを考えるようになりました」

その院生のときに実習で向かったのが、のちの初任校でもある湘南台高校だった。同校は当時、シチズンシップ教育の研究指定を受けていて、政治参加や司法参加を促す教育実践を推し進めていた。

黒崎先生はそこで、ほかの先生や外部の主権者教育の専門家と一緒に「模擬議会」のプログラム開発と実践に携わる。生徒たちが、ニュースに出てくるような国や地域の旬の議案について、本物の議会と同じように自分たちで審議・採決することを体験するプログラムだ。

実施したのは1年生の総合的な学習の時間。最初に政治参加の意義や議会の仕組みを学び、そのあとで「太陽光発電」「消費税の増税」「ゴミ袋の有料化」といったテーマについて、クラス内で生徒

たちが与党と野党に分かれて議論した。結果、生徒たちの現代社会の仕組みに対する理解は深まり、政治への関心も高まった。また、一連の言語活動を通して、思考力や表現力を鍛えることもできた。

黒崎先生は、学校で学ぶことと実社会のつながりを実感できるシチズンシップ教育に大きな可能性を感じるようになる。晴れて教師になって湘南台高校に赴任してからは、他教科との連携も模索した。例えば「太陽光発電」について検討する際は理科の知識も活用できる。また、総合学習で学んだ議論の仕方は、ほかの教科のグループワークでも生かせるはずだ。

「総合で学んだことを各教科で使い、各教科で学んだことを使って総合で考える体系的なカリキュラムまではできませんでしたが、そうしたことに取り組みました」
5年の勤務を経て、昨年度より瀬谷西高校へ。今目指すはその発展系。「公民の授業だけでなく学校全体で取り組む」キヤリア・シチズンシップ教育だ。

政治や法律が結構身近になり ニュースも見erようになった

—これまでの授業で何が印象に残っていますか？
 「18歳選挙前ということで模擬投票をしたことや、模擬裁判をしたことです」
 「みんなで役を分けてグループワークをやった授業です」
 —模擬投票は、選挙にあわせてやったのですよね。
 「そうです。だから、ニュースを見るようになりました」
 「うち、今でも見る」
 —政治や法律のことを話し合うのは難しくないですか。
 「楽しいです。劇を作るみたいに面白くてくれるから」
 「知らないことを知れるしね」
 —これを知れて良かったなあ、というのがありますか。
 「憲法とかのこととかも、あんまり知らなかったけれど、ためになったよね」
 「あとはアルバイトに関係するものとか。結構、身近なことなので」
 —皆さんの話し合いを黒崎先生はどう見守っているのですか？
 「アドバイス系だよ」
 「これはダメとか禁止したりはしないです」
 —ほかに黒崎先生の授業の特徴はありますか？
 「たとえば多いよね」
 「多い、多い。生徒の名前を使って、誰々が何々したらって」
 「だから覚えやすいです。わかりやすい。自然と入ってくる」



1年4組の皆さん

生徒はこう変わる

知って終わりではなく
やってみる意欲をもつ

学んだことを活用まですることをくり返していくと、生徒たちは授業以外でも「勉強したことを自分なりの文脈に置き換えて使おうとする」ようになってくる。例えば前任校では、18歳になった生徒たちが、実際の選挙に「行ったよ」と報告しにきてくれた。前任校でも現任校でも、ニュースを見てこんなことを思った、と話しにくる生徒が現れた。学校の許可を得てアルバイトをしている生徒が、自身の勤務上の疑問について、これは法的にどうなのかと質問にきたこともあった。「学ぶことの意味を実感してくれるようになるのが、一番嬉しいですね」

昨年度の1年生が最後に書いた振り返りシートには、こんな感想が寄せられた。「一番印象的だったのは模擬投票を行った授業です。知るだけでなく、実際にやってみるっていうのが新鮮でした」「自分が考えたりやってみたりする時間が多くてすごく楽しかった」「公民は好きではなかったのですが、1年間で法律に少し興味が湧きました」「社会のことなんて知らなかったけど、ニュース番組を見るようになり、今では社会の動きを見るのが楽しくなりました」「本当に投票したわけではないですが、何党とかを投票したのは一歩大人になった感じで嬉しかったです」

なかには、こんな感想もあった。「1年間やっぱり公民は好きになれませんでした。暗記が最後まで嫌いでした」黒崎先生が目指してきたこと、実社会で活用するために物事を学ぼうとする姿勢は、この1年間である程度は浸透したが、公民科についてはまだ暗記科目のイメージを抱く生徒もいるわけだ。だから黒崎先生は授業をさらに進化させようとしている。瀬合西高校は、新科目「公共」(※欄外参照の教育課程研究開発校に指定されており、黒崎先生はその研究も他の先生と共に進めてきた。今年度より、総合的な学習の時間を「キャリア・シチズンシップ」という名称で展開し、公民科の授業はもちろん、各教科の授業や特別活動ともつながりをもたせて、学んだことを相互に活用しあう教科横断的な学習を本格的に始める予定だ。「青臭いかもしれませんが、教育を通して『自分たちでこの社会を良くしていけるんじゃないか』という想いを育てたいんです。そう思えるから、社会のためにも『学ぼう』と。そのような意欲をもてる人になっしてほしい、と思っています」



思い描いている授業のあり方

目指す
生徒像

- 「公的な領域への参加(国や地域の課題解決など)」ができるようになる
- 「私的な領域への参加(私生活の課題解決など)」ができるようになる
- 学ぶ意味を自分で見つけて、知識や概念を学んだり、思考力や表現力を鍛えていける

実社会にあるものとの連動

参議院議員選挙に合わせた
模擬投票

地元弁護士と協働での
模擬裁判

授業内容に関連する
ニュースや新聞記事の活用

公民科の授業

活用・
探究する
場面

・公的な課題(投票や裁判など)や私的な課題(バイト問題など)のロールプレイ
 ・実社会のトピック(成人年齢引き下げなど)についてのディベート

習得
すること

・社会の基礎的・基本的な知識や概念
 ・思考・判断・表現するための型(情報の見方や比較の仕方、話し合いの手法など)

他の教育活動との連携

「キャリア・シチズンシップ」と銘打つ1~3年生の総合的な学習の時間を中核に、各教科の授業でも教科横断的に「思考・判断・表現するための型」や「習得した知識」を活用